


 ざいそう

ボート部を卒業して、またボート

小寺 修二



毎週土曜日午後2時頃から鶴見駅ビルの年金食堂（我々が勝手に命名）の一番奥の円テーブルでは平均年齢63～64歳、むくつき一見作業員風10人程の男達がビール・眞露に顔を赤らめながら、ザーサイ3人前、餃子10人前、ピータン3人前、芙蓉はい4人前、レバナ炒め4人前、焼そば4人前、焼飯4人前を順序よく次々と平らげていく。昼食には少々遅いとあって食堂もこの時間帯は空いていて他人に迷惑をかけることもなくワイワイ、ガヤガヤ……。今日の上がり350mはリズムがまあまあだった、2番の泡が無かったぞ、ピッチが少し上がらないか、いまいちフィニッシュが合っていない、久し振りに漕いだら尻がむけたぞ、昔お前のケツのデンボ（おでき）は俺がヨーチンをつけてやったよな……。勝手にオダを上げている。この連中が京大ボート部のOB連だとは誰も思うまい。

8年前の第46回東大戦（東大から見ると京大戦）から、2回生で編成する対抗戦を更に活性化させる意味もあってOB戦（エイト）が始まった。この対抗戦は大正13年から新制大学に変わる前年の昭和23年まで続いた一高・三高戦を継承したもので、新制大学が誕生した2年目の昭和25年から琵琶湖の瀬田川と戸田コース（昔は隅田川）で実施され今年で54回となるそれこそ伝統の一戦である。このOB戦は全くの惨敗でレースにならなかった。37年卒が中心のクルーで30年以上もオールを全く握ったこともなく、しかも漕層もバラバラな俄クルーでは勝てる訳が無い。この惨敗を契機に次回には雪辱を果たすべく、また健康管理という面からもボートを漕ごうという機運が高まり、翌'96年春より鶴見川で“OBが漕ぐ会”を発足させ当初は月2回で練習を開始した。

ボート発祥の地であるイギリスではヘンリーレガッタにエリザベス女王が観戦されるほど盛んで、川・湖沼のあるところにはボートクラブがあり男女を問わず生涯スポーツとしてボートを楽しんでいる。日本ではマイナーなスポーツであり漕いだことのある人間にしか理解し得ない奥深いもので、筋力の強さでいうと脚力（300kg）、背筋（220kg）、腕力（100kg）の順であり、艇速が一番落ち一番重い水を脚でつかみ、その力を背筋に伝え艇速のピークとなるフィニッシュで筋

肉として最もスピードのある腕で一気に水を押し切るという合理的なスポーツなのです。ボートにはローアウトという言葉があり、仲間を信じゴールに向けてひたすら全力で漕ぎゴールと同時に筋力も心肺機能も使い果たし仮死状態になるという意味を表している。還暦を過ぎた身には昔と較べるべきものでないけれども年相応なローアウトを目指す心境になっている。練習を開始した当初、それ程落ちていないと自負していた筋肉はいざ漕いで見ると軽目の練習にもかかわらず息は上がるし腹筋も力が抜けてフォワードもままならず、両舷を腕で支え腰を伸ばしたり叩いたり、目の前が貧血で暗くなったり散々な状態だった。それでも一年も漕ぎ込んでくるうちに自信らしきものが生まれてきて、'98年1月1日～4日にワイキキビーチの北1km程にあるアラワイ運河で行われた第4回Royal Hawaiian Rowing ChallengeにKyoto University“old boys”（平均年齢60）としてオープン部門に参加。当時ハザマの東関東支店長という事もあって御用納めの翌朝出発、レース前半の2日間1,000m・3本、500m・3本に出漕、帰国翌日が仕事始めという強行スケジュールだった。このR.H.R.C.は全米漕艇協会に認可されたレガッタでハンデ規定が適用され年令差があっても同一レーンで漕げるという全く新鮮で楽しいレースであった。戦績は云うに及ばず参加することに大いに意義ありと述べるにとどめておく。

昨年は現役を退いたこともあって夏から180坪の畑で落ち葉拾いからの堆肥作りとEMボカシを使った完全有機・無農薬農業に挑戦、しかも人力だけでやっており、これもボートの練習の一環と位置付けており駐車場の屋根下は黄玉葱と赤玉葱、居間はじゃが芋の保存場所と化している。10月にはプラハで行われた世界マスターズ選手権大会に60～64歳のFクラスに平均年令62歳で出漕。益々意気軒昂である。プラハに同行した早稲田、日大、法政、立教、中央、防大の混成クルーは今年南仏でのマスターズに再度挑戦するとの事、健闘を期待してやまない。